
「対話的コミュニケーションとしての学びー「学びの共同体」の学校改革」

日にち：2014年3月2日（日）

時間：13：00～14：30 講演

14：30～15：30 振り返り・質疑応答

場所：東京大学 情報学環 福武ホール 地下2階 ラーニングシアター

講演：佐藤 学（学習院大学文学部教育学科 教授）

ナビゲーター：荻宿 俊文（青山学院大学社会情報学部教授）

<PART1.> 学びの共同体の学校改革

生涯学習開発財団の今年度最後の講演会は、学習院大学文学部教育学科佐藤学先生に、「学びの共同体」を軸にコミュニケーションとしての学びについてお話いただいた。

まずは「学び」という概念を共通理解として持つことから講演はスタート。少し前までは、学習と勉強という言葉のみが使われていた。「学び」という言葉を使い始めたのは実は佐藤先生。21世紀は「学び」が社会や人間の活動あらゆるものの中心となることを世界が感じ取ってきていたので、みんながこの言葉を使い始め今は普及した。学びとはそういうニュアンスで感じ取ってほしいとのこと。

<対話的コミュニケーションとしての学び>

佐藤先生が今まで訪問した学校は、3000校にのぼる。週に2日はどこかの学校へ行っている。海外は27カ国500校になる（アメリカ、ヨーロッパ、アジアなど）。

最初の1000校はなかなかうまくいかなかった。学校は簡単に変わるものではないのだ。分かったのは学校の改革は教師と協力して内側からしか変えられないということ。学校は内側から改革しないとだめなのだ。だが、日本も世界も学校の外からだけ改革することを繰り返している。佐藤先生は、数多くの失敗の中から、教師を信頼し、保護者を信頼し、子ども達を信頼し共に変えるし

か教育を変える道はないと考えに至ったという。

さらに、学校の内側からの改革は外から支援しなくては持続できない。いくら内側から教師や子ども達がかんばっても、保護者が支援してしも、教育行政の支援がなければ持続できないのだ。

1998年茅ヶ崎が100%丸ごと取り入れた学校を作りたいと提案してくれて、浜之郷小学校で佐藤先生の理論を全てを取り入れてくれた。

開校式はうるさくて中止になり、30人の不登校児いて、どの教室でも5人以上机についていないという状態からスタートの学校であった。しかし半年後に不登校児はゼロになって、今日まで16年間ゼロのままだそう。

この事例をきっかけに全国に一気に広がり、今、こういう改革に取り組んでいる学校は小学校で約1500校ある。中学校で2000校、高校でも500校で取り組んでいる。

学びを取り入れれば半年も経たないうちに問題行動は全部無くなる。そして、子どもが学び続ける限り絶対にくずれないのだ。子どもにとっての学びは生きる権利の中心であり希望の中心。教室では子ども達が一人残らず学びの主人公で、学びの主権者ひとりひとりが主人公なのだ。逆に学びに絶望した子どもや希望を持たなくなった子ども、学びから逃げ出した子どもは本当にかわいそう。キレるし自分自身も崩壊していく。

だから、学校のやることは一人残らず学ぶ権利を保障することなのだ。健康で文化的な生活を送れるように、育て上げる必要がある。大変だが重要なことだ。幸福追求権・生きる権利の中心として保障されなければいけない。

新自由主義が作り出した「教育はサービス」の行政やシステムは根本的に間違っている。教育は大人の世代が次世代に対する責任なのだ。親と教師の責任を、親と教師が一体になって協力しなければ、一番の被害者は子どもになる。もめてばかりで子どもは無視されるという構造を変えなくてはいけない。「学び」を取り入れた学校は、少なくとも8割の親が学校を信頼し協力し参加してつくる。

この3つの学び合いー子ども達が学び合い、親達も参加して学び合い、教師達が学び合う、これが学びの共同体である。

先ほどの事例の浜之郷小学校は、16年間に親の苦情の電話がない。PTAがない学校だが、保護者の8割が学びの共同体に参加してくれる。授業を手伝ってくれるのだ。学校が信頼を得ている。学びの共同体は不可能なことではない。

佐藤先生は次に、現在コミュニケーションモデルから、学校の「学び」をどう考えるかとして、コミュニケーションモデルの説明と3つの考え方を提示した。1つめはコミュニケーションの「発信—受信」モデルについて。この「発信—受信」モデルが人間のコミュニケーションの形だと思っているのが根本的に間違っている。これはコンピュータのモデル。「あいさつをする」ことを事例に、人間は単純なコミュニケーションの中でも受信が先で、相手が自分を受け止めてくれるかどうかからはじめることを指摘。「おはよう」だけではなくその後が大切で、「おはよう今日も暑いね」とか「昨日はごめんね」からコミュニケーションは始まるのである。

コミュニケーションにおける受動性と応答性を無視している。

まず受け入れるのが最初。「発信—受信」は受動性を無視している形である。そして、コミュニケーションはアクティブにならなくてはならないという既成概念を佐藤先生は逆に捉えていると訴えた。コミュニケーションは受動的：パッシブにならなくてはならないのだ。まず受け入れることから始まるのだ。

2つめは単相的コミュニケーションモデルの批判。

「単交通」—一方、テレビ

「双交通」—ラブレター

「反交通」—遮るカタチ。ダンと断られる。跳ね返す

「異交通」—全然違う話をしている。微妙にすれ違う。噛み合わない。

佐藤先生は（篠原資明「言の葉の交通論」）の重層性と複合性を尊重する。

学びに一番いいのは「異交通」であり、頑固で異質な他者とのコミュニケーションが一番の学び仲間だ。自分を鍛えることになる。ここで重要なのは、重層性というのがポイントだ。

また佐藤先生は、「双交通」こそがいいとどこかで思っている考えを砕きたいとも提案。前にあげた4つの交通分類は全部大切。人間のコミュニケーションは複雑なのだ。先生が体験した事例を話してくれた。中学校で50歳過ぎのベテラ

ンの先生が授業中、ある生徒が机に足を乗せていろいろ言って授業妨害している。グループを作ってもやろうとしない。先生が「一緒にやろう」と言ったが、生徒は「いつもはやらないくせに」「佐藤先生が来ているからやってるんでしょ」と言った。

先生は「いつもやってるわよ！」と机を叩いて怒った。その後生徒は机を倒して出て行った。

いっしょに見ていた校長は心配している。佐藤先生の予想だと20分後に帰ってくると言っていたら、15分後に「せんせごめんね」と言って帰ってきた。立派だよ。コミュニケーションの素晴らしさが表れている。

ここで考えて欲しいのは、二人ともひとつも自分の尊厳を低めていないところ。お互いに自分の尊厳の為に怒った。こういうぶつかり合いはすばらしい。女の子も偉い。先生も偉い。お互い人間が自分の尊さを懸けてぶつかった時にすばらしいことが起こるのだ。

この事例には、単交通、反交通、異交通、双交通が全部入っている。コミュニケーションというのは重層的で薄っぺらなものではない。お互い感じ合ったり、響き合ったり、分厚くて複雑な動きをしているのだ。

3つめは、「学び」におけるダイアログを開くとともに、ダイアログイズム（対話主義）の危険性を指摘した。対話中心主義は、授業に話し合いばかりで学びがない。協力し合っているが、何も学びは生まれない。ダイアログには危険がある。コミュニケーションは話し合いではない。ジョン・デューイによれば民主主義は他者の声を聴く事が出発点で、「目は批評家を生む。耳は参加者を生む。耳は一番受動的でありながら参加を促す。」これが改革を生み出すのだ。

<学びの共同体の学校改革>について

佐藤先生は、「学校改革とは単純なやり方ではなく、ヴィジョン、哲学、システムのことであり、この3つが揃ったときに改革が成功する」と提示して、詳しく解説をしてくれた。

- 1、ヴィジョンについて—目指すべき学校のヴィジョンとは、子どもたちが学び育ち合うだけでなく、教師も学び育ち合い、保護者や市民も学び合う共同体としての学校であること。一人残らず子どもの学びの権利を実現し、一人の残らず教師の専門家としての成長を保障する学校であることだ。

ヴィジョンの共有が一番大事。ヴィジョンを持たない校長はすべてを回そうとして教師をつぶし、ヴィジョンを持たない教師はすべてを回そうとして子どもをつぶすのだ。

- 2、哲学について－公共性の哲学：学校を公共の開かれた場所にするのが大事である。地域にも開かれた場。つまりすべての教師が授業を公開し合うことが基本で有り、一人でも公開しない教師がいると失敗するであろう。
- 3、活動システム－聴き合う関係が基盤。教室では協働する学びのこと。教師は同僚性の構築が必要である。保護者・市民の「学習参加」親も生徒と一緒に学び、学校のためにやっていると思ってくれるというような改革をしていきたい。

佐藤先生は写真を見ながらの事例を紹介。子どもは一人では学べないこと、子ども達同士が学び合っていく姿がそこにはあった。

<PART2.> 「学びの共同体」 21世紀型の学校

佐藤先生は『21世紀型の学校の特徴』として以下の5点をあげた。

①質と平等の同時追求。②カリキュラム＝プログラム型（知識習得の即効性）からプロジェクト（思考探求の発展性）型へ。③授業と学び＝一斉授業から協同的学びへ。④授業研究＝「仮説—検証」から「デザインとリフレクション」へ。⑤教師＝「教える専門家」から「学びの専門家」へ。

そして、特に①と②について考察していった。

① 質と平等の同時追求—現在の発展途上国は量の時代で、先進国は学ぶ意味の時代になっている。先進国は質の時代であり、やるならば質の高い授業をした方がいい。意味の方を大切に。この学ぶことがどんな意味があるか、この学ぶ意味がどこへつながっていくかを念頭に、その学びがそういう意味を持つか、「学ぶ意味」を大切にしないと失敗する。

② カリキュラムは探求中心—環境も大切である。教室の環境も変化している。全員が前を向いている席の配置は過去のものになっており、社会が変わっているので一斉授業への移行がみられる。教師は教える専門家から学びの専門家になっている。佐藤先生は1980年代から写真をとり続けているが、2010年にかけて世界の教室は著しく変わった。一番早く変わったのはカナダで、円座を組んでの共同学習のあとペア学習をしていく共同学習のスタイルである。だんだんと世界中がこうなっていっており、静かな革命が進行中だ。

変化の遅いアジアもここ5年で教育改革を全面に打ち出している国が多い。台湾では教育庁で佐藤先生のセオリーを取り入れた授業のプロジェクトに国家予算がついている。新しい学びが動き出しているようだ。

<学びの再定義>を試してみる。

講演の冒頭で触れた「学び」の認識について、佐藤先生はさらに詳しく定義付けした。

「学び」は以前から伝統としてあり、修養；伝統自分の内面を豊かにすることと、対話；伝統対話によって世界を認識しようということである。

しかし、「学び」には実際には3つの疎外がある。

ひとつは『対象』の疎外である。ピアノがない、テキストがないなどの状態のこと。例えば学ぶ対象のテキストを5分読んで話し合いするなどは、テキストからの疎外であり、対象からの疎外である。社会科で資料を渡されて終わってしまうこともその一例。

ふたつめは『他者』の疎外。学び合う仲間がいないなどの状態だ。一人にすると学びは起こらない。例えば、「まず1人で考えてください」とよく先生はやるが、これは分かる子どもだけに有効で、分からない子は5分経っても分からないのだ。

さらに3つめは『意味』の疎外。活動的・協同的・反省的实践としての学び。なにを学んでいるかわからない状態になること。

佐藤先生は、さらに「学び」というのは既知の世界から未知の世界への旅（出会いと対話）出会いが大切であるとした。「古今東西、学ぶことはみんなジャーニー（旅）です。」

対話について佐藤先生は既存概念の間違いを指摘した。教師は話し合いが活発なことがいいと思ってしまうが、そこに学びはない。なぜ話し合いが活発だと学びはないのか。それは簡単で、既に分かった事を共有しているからだという。分からない事は活発になりえない。ぼそぼそ話す状態が普通なのだ。「どうなんだろう。」「どう思った？」「今何か言った？」と話が進んでいく。学び合いとはつづやきの共同体であり、話し合いの共同体ではないのである。

他者との対話、対象世界との対話、未知との対話、この3つの対話が揃ったところが「学び」であり、対話的实践としての学びとは、対象世界との対話である。

他者の声を聴くことが「学び」であることを佐藤先生は指摘する。「学び」は受動的であって能動的、受動的であることが能動的という表裏一体のものである。先出の浜之郷小学校では、16年間先生が静かにといった事が一度もないという。聞きあうことがちゃんとできているのだ。

次に協力学習；協同的学びについて佐藤先生は、ヴィゴツキーの発達最近接領域を軸に話を進めた。子どもは他者とやった方が多く学べるということである。現実の発達レベルは精神発達を回顧的に特徴づけるだけ。こどもはできる事はやろうとしないし、上すぎる事もやろうとしない。学ぼうとしないのだ。

例えば、逆上がりができない子が大車輪はしないように、子どもは学びの可能性のあることにしかチャレンジしようとししないのだ。

ここで佐藤先生は今までの誤りを指摘する。その子のレベルにあわせるのではなく、上のレベルにあわせるべきだ。共同的学びで、できなくても挑戦したほうがいい。そうするとみんな学び出すのだ。教え合いダメで、「分かった人は教えてあげて」というのもダメ。それは一方的な関係にしてしまい、できる子は教えてしまう。教えられている子は自分ができないと受動的になってしまい、高校生ぐらいになると友達や教師を恨むようになる。自分を見捨てたと思う。どうすればいいのかというと、「分からなかったら友達に聞くんだよ」というべきだ。自分で聞くのである。自分の窮地をさらけ出して、仲間に助けてといえる能力が必要なのだ。できない子の特徴は一人でやろうとするとところだ。例えば、とび箱を飛べない時に自分だけでやろうとするのは学び下手だ。他者の援助を引き出す。「ねえ、ココどうするの？」から始まるのだ。

本物の学びはオーセンティックだ。本物らしい学び偽物ではない学びがある。文学は、文学らしい学び。数学は、数学らしい学びがあり、「話し合う」ではなく、「聞き合う」関係が「学び」をジャンプさせる方法である。

<協同的学びの2つの機能>については、佐藤先生は以下の2点について写真と実例で説明した。

- 1、「なぞり」これが典型的な学び。まねび。相手の考えを真似る。
- 2、「スキャフォールディング」相手の考えを踏み台にしてジャンプ

2年生の特別支援の子どもが3年生と一緒に学んだ時に、すごい成長があった。異分母の計算やりたがり、皆がやっているのを見てかけ算の構造が見えた。

授業の方法として、1・2年生はできるだけくっついて授業を受ける。このとき、夢中になって高いレベルに挑戦できる学びが必要で、前半は教科書が中心で、後半は上の学年と学習。分からない子ども程、ジャンプすることが大好きだ。一人ではやらないが共同だとやる。

沖縄の例では、荒れ放題で学力テストは県内最下位の学校が、2年後には学力がアップして県内でトップになってしまった。

また違う学校では、中高一貫校のため8年かかったが、今では卒業生の1/3が東大、京大、早慶などへ進学した。中高生の時期は伸び盛り。一貫校で6年あるからできるというのものもある。

また、「互恵的学び」についても実際の例を示した。場面緘黙症の男の子が、唯一話せる友だちが休んだときに、英語の授業があった。男の子は英語が得意だが、それを知らない低学力の女の子が一生懸命関わって学び合いをした。結局終わった後には2人で発表した。

能力があるもの同士が共同するのではない。できない子同士が集まったらできないというのは間違いで、それこそが互恵的な学びである。相手に尽くすことによってお互いが高まること、お互いにもろさを支え合うことが重要なのだ。

佐藤先生は今後検討すべき論題として、

- 1、教師のヒントが一番いいはずだが、教師のヒントは邪魔になる。できる子のヒントよりできない子のヒントの方がいい。できない子の意見がジャンプを作ることの研究が進むこと
- 2、互恵性
- 3、アクションリサーチ

の3点をあげ、「一番言いたかったのは、聴き合うということです。」と締めくくった。

<PART 3.> 質疑応答

ナビゲーター：苅宿 俊文（青山学院大学社会情報学部教授）

前後左右でグループを作り15分くらい周りの人と話す時間。
振り返りと共に、質問があれば付箋に書いてスタッフに渡す。

——質問タイム（会場からの付箋質問から）——

苅宿：みなさんからの質問をまとめて質問していきましょう。

学校改革はどう始まっていくのか？

最初の一步は？どんなところからスタートしているのか？という質問です。

佐藤：多様です。学び共同体の公開研究会がある。誰でも参加可。全教室公開。

研究会のホームページもある。何月何日と出ている。みなさんも参加できます。昨年1000回以上。（1000校以上ということ）200人から500人、少ないと30人。まず、子どもの姿を見て感動して始める人が多い。百聞は一見にしかずですね。本からではなく、子どもの姿を見てというのが多いです。学校がひとつにまとまらないとだめで、校長が提案するのが多いです。リーダーシップがきっかけとなっている。

問題はどうか持続するか。10年はやらないと無理です。15年、20年とやらないと難しい。繰り返してやる。学校は今年度はここまで、来年はとすぐに言う。できてもいないのに、次の階段にいかうとする。毎年同じことをやる。繰り返してやる。校長が変わっても崩れないです。

中学校高校は、15年で始めた学校で中断したところは一校もない。生徒が絶対にやめさせない。始まりは、困難校が多いです。よりよくしたい学校ですね。一番最初は全ての先生の公開授業です。

苅宿：次に多かったのは、聞き合う関係の最初はなにかという質問です。

教員と生徒の2つを主語にお話していただけると分かりやすいかもしれません。

佐藤：子どもの指導で聴くというのが一番難しい。聴くんだよといっても聞かないよね。指導のポイントはひとつ。教師自身がよい聴き手になること。いい教師はいい聞き手であるというのは、尊敬しているアメリカの学校改革者、デボラマイヤー（北田佳子翻訳）の本に書いてあります。教える仕事のほとんどは聴く事にある。どんなつぶやき、言葉にならない声、それをモデルにして子どもも聴くようになる。子どもが小さい声の時、もう1回大きい声で言ってと
いわない。「今、誰々さんおもしろいこと言ったよ。みんなでもう一回面白いからよく聴こうね」と促す。こういうことを続けていくとみんな聴けるようになる。

あとは、リボイスです。まずは、発言の後に自分の言葉で言わせる。聴き合うことによって丁寧にする技術。分かった事を教え合うのではなく、分からない事を聞き合う。これで育つ。

苅宿：ここでちょっと今回の参加者の特色で出てきた大人の学びについての質問です。

小中学校で起きていることが大人の学びでもできるのか。

共通性の高さに驚きがある。大人が学びに持っている絶望もある。

企業ではどうでしょう。

大人の中での学びに引きつけた意見がある。

まず、大人の学びで同じ事が起きるのか？

というのが出てきていますが、そのあたりはどうでしょう？

佐藤：ぼくが接しているのは教師たちですが、そこでも学びというのは生み出される。社会は難しいです。子どもたちの学びの希望を奪っている。企業人のリーダーもいない。大人は時には慎み深さ、謙虚さが必要である。今、大人の社会の中に学びの文化がないとすれば傲慢になってしまっているからではないか。あまりにも饒舌になっている。うるさい。みんなもうちょっと聴こうよって言いたい。もうちょっと丁寧に話そうよ。学ぶ価値を大切にしよう社会。企業も同じ。学び合う企業しかもたない。

饒舌な話ということでは、一言話してもうるさい人がいる。たくさん話してももっと聞きたい人がいる。それは为什么呢といつも考える。

一言でもうるさい人は、言葉の問題がある。人間の言葉というのはどうしよう

もなく我が入ってくる。俺が、俺が、というのが入ってくる。そうするとうるさい。それが無いのは心地よい。聴こうとするのが大切です。

苅宿：次に、佐藤先生が問題点とっていらっしゃることは何かという質問です。企業や大人で効率性、学校もよく言われるが、誤解があるのではないか？ということについてはどう感じていますか？

佐藤先生：協同的学びは進度が遅れると思っている。実は結果は全く逆です。一斉授業の中にいれようとするから遅れる。最初から最後までやれば進度は早まります。同時に密度の濃さを考えなければいけない。一斉授業の5分毎の写真がありますが、開始から35分経つとみんなつまらなくなってくる。それで進度のことを言っても意味が無いのです。夢中にさせる経験が大切。それが効率性だと思います。

苅宿：話し合うというのが効率性が下がるという人がいますが、それは誤解です。そこは絶対押さえていただきたい。

佐藤：ただ、課題のレベルがやさしいとだめです。課題のレベルを上げること。普通は自分が正解だと、終わったと思ってしまいが、この子たちは違う。他のアプローチないかなといつも問い続ける。どの子も分かった状態にならないです。だから対等。学びの作法ができています。いつも分からない事を見つけ出す。分からないことが大切です。心の習慣を作ることが大切で、課題のレベルも大切です。

苅宿：ひとつおもしろい質問がありました。

先生が「学び」という言葉を作ったという話がありましたが、作ったのは佐藤先生ではなく、「学」と名付けたご両親ではないでしょうか（笑）

佐藤：小さいころ嫌だった（笑）。大人になったらどうしてくれるのかと思いました。でも両親は生涯学習の時代だと言っていました。これからは大人世代が子どもにいろいろという時代ではなく、子どもが自ら勝ち取っていく時代だと言っていた。「あんたはどう思うのか？」といつも対等に質問されて、徹底した

民主主義で育ちました。そういう家庭で育ったので、僕の名前はそういう両親の願いだと思います。5歳からずっと相談させられましたね。「明日どうする？」とか。一生懸命、民主主義であろうとした。教育学者を運命づけられていたのかもしれないです（笑）

苅宿：これでディスカッションの時間は終わりますが、今後もどこかで佐藤先生の活動に参加できればと思います。

佐藤先生ありがとうございました。